

「土の器」として

丸山 勉

【聖書】 コリントの信徒への手紙二 4章6～18節

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きています、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることとなります。「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

【序】 私たちの「信仰告白」

お祈り頂きましたように、今日は午後「川越キリスト教会に助言と励ましの会」が開かれます。近隣の上尾教会の秋山先生、大宮教会の永町先生、所沢教会の坂本先生を迎えて、川越教会と私の「信仰告白」を確認して下さいます。川越教会と新任牧師のわたくし丸山がこれからの川越教会の歩みに「一致」して行けるように助言、またお励ましを頂く大切な時にならうと思ひます。

そこで一番大切なことは、**同じ信仰に立つ、ということだ**と思ひます。独楽(こま)が回転していく時、軸が幾つもあったら独楽は回転しません。**同じ軸**に立って行くのだ、ということを確認する時だともいえると思ひます。そこで問われるのが「**信仰告白**」です。バプテスト教会は、それぞれの教会と牧師が自分の言葉で信仰告白をします。とても自主的、自立的です。けれども、一歩間違えたらば、オリジナルであることは悪くないのですけれど、**聖書全体のメッセージから逸脱してしまう**ということもなりかねません。**聖書が語る「キリスト教信仰」とは何なのか。**そのことを絶えず聴いていく必要があるのだと思ひます。

キリスト教信仰の最も重要な点は、私たちが、**イエス・キリストこそ生ける神の子、救い主**であると信じて、そしてこのお方が、**今も生きていて、私たちと共にいて下さる(インマヌエル)**ということに信じていることです。

【1】 「共にいる」とは？

さて、この「**共におられる**」という信仰ですが、その内実について私たちは(私ももちろんそうなのですが)ともすると**誤解**してしまう点があるのではないかと、思っています。

四国のお遍路の旅、というのはとても人気がありますね。88ヶ所の札所を歩いて巡っていく旅ですね。白衣(びやくえ)を着、頭には三角錐の笠を被ります。その笠には文字が書いてあるんですね。「**同行二人(どうぎょうにんにん)**」と言う言葉です。ある方が「同行二人」をインターネットでこう説明していました。

「この修行の道は一人で歩くのだが、決して一人ではない。いつも弘法大師(空海)がついて一緒に歩いてくれているということである。キリスト教でいうなら、『イエスといっしょ』というような意味である。」と。そして、歩く際の杖である金剛杖には、その弘法大師が宿っている、という考えがあるようです。弘法大師(空海)は死んだのではなく、今もあなたと共に歩いていますよという理解がそこにはあります。これは、お遍路する者にとっては励まされることなのだと思います。

ただ、このように「目には見えないけれども力ある存在が私と共にいてくれる」という考え方は、お遍路だけではないと思います。いっぱいあると思います。人気映画の「スター・ウォーズ」シリーズも、ここ一番という時には「フォースが共にあらんことを！」という、(あれはもう祈りですよ)力を求めて、悪の力に勝つ」というシンプルな構図を持っています。あの分かりやすさが、ある面、人気の秘密なのだろうとも思います。

では、「空海さんが一緒」「フォースと共に」、そういう考え方と「イエスが一緒」という信仰は同じなのでしょう？一私は似ているようでいて、けれども**決定的に違うものがある**と思います。それをご一緒に御言葉から見てゆきたいと思います。

[2] パウロの確信はどこから

今日の聖書箇所は、印象深い言葉が沢山記されています。愛唱聖句にしたいような御言葉が沢山出てくる部分ではないかと思えます。

特に7～10節、そして、16節以下の言葉をもう一度味わってみたいと思うのです。

「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。」(4:7-10)

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。(中略)わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」(4:16、18)

パウロは言うのですね。「行き詰まらない、失望しない」、そして「落胆もしない」と。これはいわゆる「心の持ちよう」とは違うものですよ？ 私たちの心というのは、絶えず波風が立ちますし、ペしゃんこにされてしまうことがあるものです。そういう私たちがやせ我慢のように「行き詰まらないぞ、失望しないぞ、落胆しないぞ」と自分に言い聞かせてみても長続きはしません。そんなことはパウロは百も承知だった訳です。では、パウロのこのような確信はどこから生まれてくるのでしょうか？—ここが「聖書」の「聖書」たる所以だと思います。

パウロは、イエス・キリストと出会って、それまでの自分の自信(それは宗教的生活、ひたすら神の掟をそらんじ、従おうとする生活)が木っ端微塵に砕かれた人でした。しかし、パウロはそのおかげで今の自分がある、と言っているのです。6節をご覧ください。

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

旧約聖書・創世記の初めの方に、「神は、光あれと言われた。すると光があつた」と書かれています。それをパウロは自分自身の、主イエス様との出会いの出来事になぞらえて語っています。言い換えれば、自らの「天地創造」と言いますか、「新創造」の出来事が、神様の光が自分の内側に輝くことから始まったのだ、と語るのです。

第二コリントの5章17節にも有名な言葉がありますね。彼は自分のこととして語っているのです。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであつて」と。

[3] 私は「土の器」なのだ

パウロは、イエス・キリストこそ、自分を真実に救ってくれるお方だということを知った時に、自分自身を絶対化して生きる生き方を手離したのです。それは自分の力によってではありません。「すべては神から出ること」。ですから、自分で生まれたのではなく、「新しく創造された者(造られた者)」と語っています。

さて、今日の聖書の箇所の中で特に印象に残る言葉は、「土の器」という言葉ではないでしょうか？ これは本当に味わい深い言葉です。ただこの言葉も、ともすると単に「謙遜」とか「謙った者」の別の言い方なのかな、と思ってしまうことがあるかもしれません。けれども、パウロはもっと現実的な意味合いを込めて「土の器」と語っているように思うのです。

パウロは、自分の肉体を持って生きる伝道者の激しい労苦を誰よりも体験していた人だと思います。たとえば、11:23以下にはこのようなことを語っています。

「苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。(中略)しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽(にせ)の兄弟たちからの難に遭い、苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食わずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」

恐らく「もうこれでおしまいかな…」と思ったことが何度となくあったパウロにしてみると、「ああ、本当に自分はいつ粉々に壊れてしまうか判らない“土の器”だなあ」と思ったに相違ありません。けれども、器が、器であることは、その中に何かが入ることによって、器に「意味」が与えられるのではないのでしょうか。ただ置いてあるだけでは、本来の意味を喪失してしまうのです。パウロという「器」に入ったもの、それは何でしょうか？

端的に言って、それは、私は「イエス・キリストご自身」だと言っても良いのではないかと思います。パウロは、イエス・キリストを運んだ器なのです。7節をもう一度読みますと、「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであつて、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。」とありますように、先週のメッセージと共通するかもしれませんが、彼パウロは、全く力んでいないのですね。「この並外れて偉大な力は神のもの」だと。だから彼は全く自由に、そして大胆に、神様に持ち運ばれる者として、喜んで、主キリストを諸外国まで伝える働きにその身を捧げたのです。「キリストの香り」をいたる所で播き散らしたのです、丸であの、イエス様の前にナルドの香油を捧げきったあの女性のようにではないでしょうか？

そしてパウロは、伝道の困難に出会えば会うほど、主イエスのお姿をととても身近に感じたのではないかと思います。私の労苦は、元はと言えば、あのお方—私の罪のために黙々と十字架を担ぎ、鞭打たれ、愛する者たちからも嘲られ、見捨てられ、最後にはわが罪の身代わりとなって死んで下さったあの神の子であるお方—の労苦に根ざしているものではないか！と。本来は天の座におられるお方であるのに、それこそ、「土の器」になって下さったお方の後を、わたしは従っているだけではないか、と。

ですから、パウロは10節以降で「主」とか「キリスト」という言葉ではなく、「イエスの死」とか「イエスの命」という、人となられた神の子、「土の器」としてこの地上を歩まれたナザレのイエスということを描きながら筆を進めています。10～12節。

「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることになります。」

…これは、週報にもお書きしましたがけれども、私たちが人間的な思いで期待する聖書の言葉とは次元が違うと言いますか、私が自分の頭で納得しようとしてもそこからはこぼれ落ちてしまう、いきなり海の深みに連れて行ってくれたような感覚さえ覚えます。これは「理解」する・しないということを超えて、「このように信じてよいのだ」ということをパウロは語ってくれていると私は思うのです。

それは、私たちの命に、今何が起こっているかという、ある意味、神様がなさって下さっている神秘的なことです。「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています」と言います。「まもっている」とは、無教会の矢内原忠雄は、「身に着けて持ち運ぶ」という意味だと言っています。イエス様の死と私の死は結びついて離れないのだ、ということです。こんなに大きな慰めはありません！ 私たちは死ぬ時にも独りではないのです。イエスの死に覆われて死んでいくことが出来るのです。

そして、パウロは言います。「(それは)イエスの命がこの体に現れるために」と。更に言い換えて、「わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。」と、今度は復活されたイエスと私たちは一つとされるのだ、と言い切ります。こんなに大きな希望があるでしょうか！しかもパウロはこれを「願望」で書いているのではなく、現在起こっている、信仰による「事実」として書いているのです！

「こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることになります。」パウロが苦しみながらも「キリストの香り」—十字架の愛の香り—を凱旋將軍のようにコリントの人々にも播き散らした。そのことによってあなた方の中にキリストの命が産声をあげている、いやそれどころか、あなた方自身が今や私の「推薦状」そのものにさえなっているではないか、と神様を賛美しているのです。

[結] この「招き」にお応えして行こう

とても不思議な出来事だと言ってよいと思います。それこそ「並外れて偉大な力」が働いているのです。先ほど私は「共にいる」ことの違いについて申しました。私は弘法大師さんのことは良くわかりません。けれども、キリストがこの地上を歩まれ、死んで、そして甦られたことは確かなことです。そしてそのお方は、私たちに「見よ、私は世の終わりまであなた方と共にいるのである」とおっしゃいました。また、「二人、また三人がわが名によって集うところには私もその中にいる」とおっしゃいました。それは、主との交わりへの「招き」でもあります。私たちはそのお方の「招き」を、いつも新しく受けているのです。礼拝ということもその招きへの応えに他なりません。

主イエスの中に、真の神様の愛を見出した、いえ、自分自身を見出して頂いたパウロは、ですからこのことを「知っています」と力強く語っています。13-14節。

「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」

これは、大きな驚き、また、大きな約束です。パウロ自身が体験したことを私たちも体験します。17節では「わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます」とも言います。やがての重みのある永遠の栄光に比べれば、今の自分の艱難が何と一時的な軽いものにみえてくることか、と。

ご一緒に、この神様の「命のドラマ」にアーメン！と唱和し、神様に集められた仲間として、ご一緒に進んで

参りたいと思います。

最後に、応答賛美として選ばせて頂いた新生讃美歌「成したまえ、なが旨」の歌詞の 1,3,4 節をお読みして、お祈りさせていただきます。この歌詞の中の「陶作り」とは、陶器師のことです。「器」の作り手、また、それを自由に用いる主なる神様です。

「成したまえ、なが旨、陶作りわが主よ、われはただ なが手の 御手にある 土くれ。
あまくだる 火を持って わがうちを清くし 成したまえ なが手の器なる わが身と。
ながむねの なるとき 他の人はみるべし 我が内にます君 キリストの 姿を。」

主イエス・キリストの父なる神様、あなたの尊い御名を賛美致します。

この私たち一人ひとりの存在＝「土の器」に、キリストの命という「宝」が盛られています。それに私たちは気付きませんでした。それは神様の中に“隠されている”とコロサイ書にもありますように、信仰の目と心で初めて判らせて頂ける宝なのだと思います。今日、そのことを御言葉から教えて頂きましたから、自分自身の小ささ、弱さに嘆くことから解放されて、「神様がお造りになったものは、はなはだ良かった。あなたは我が目に尊く、重んぜられる者」との、あなたの、私たち一人ひとりに注がれる愛を、どうぞ深く確信させて下さい。

そして、そのことを、多くの方々にお伝えする働きのため、私たちを「器」として持ち運び、あなたの御業を進めて下さいますよう、お願い致します。

これからの川越教会の歩みを、どうぞあなたが先頭になり、導いて下さい。

病の中にある方、リハビリに励んでいる方、今具体的なあなたの助けを必要としている方々に、あなたの暖かな御手を置いて下さいますように…。

救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。